

2012

甲南大学文学部人間科学科

谷口文章研究室

2012 年度 卒業論文 要旨

農薬の使用と有機農業

—環境教育の実践を通じて—

栗林 昇史

はじめに

第一章 農薬の使用の歴史

第一節 農薬使用以前の農業

第二節 農薬の多使用期

第三節 現在の農業

第二章 農薬の自然環境への攪乱

第一節 農薬の生物への害

第二節 自然環境と農薬

第三節 遺伝子操作について

第三章 有機農業による環境教育

第一節 環境教育の役割

第二節 有機農業の現状

第三節 有機農業による環境教育

おわりに

<要約>

まず、農薬の使用の歴史について調べ、防虫駆除から農薬の使用への変化と農薬の使用の方法の変化などの歴史について浅いものではあると思うが社会的、化学的な立場から理解することができた。次に、農薬が実際に何にどのような影響を与えているのかということについても調べ、農薬は人間や家畜の体を蝕み、風、川の流れや生物間での物質循環によって思いもよらないところまでその被害が広がり、自然に生きる生物にまで害を与えてしてしまうことがわかった。また、最近開発され行われている新しい農法としての遺伝子組み換えについてもいまだにあまり解明されておらず、国々によって規制もまったく異なっていることを知った。

これら調べてきた農薬というものの及ぼす悪影響を妨げるためにはできるだけ、農薬を使わない有機農業を行うことがよいと考え、最後には自らの体験や、特に国内での環境教育の現状など、実践的な環境教育の面から有機農業を進めていくことがよいという結論に至った。

サンゴ礁から見える地球環境問題

～持続可能な海洋環境を目指して～

井関 裕唯

はじめに

第一章 サンゴとサンゴ礁の現状

第一節 サンゴの生態

第二節 世界におけるサンゴ礁

第三節 地球環境問題の観点から見たサンゴ礁

第二章 サンゴと赤土流出問題との関連性

第一節 土地開発の観点から

第二節 農地改革の観点から

第三節 開発と保全のバランスにおける課題と展望

第三章 持続可能な海洋環境を目指して ～解決のために～

第一節 緑肥作物栽培（ヒマワリ）を活用した海洋環境保全活動

第二節 赤土流出防止対策の提案～観光地域づくりの面から海洋環境を学ぶ～

第三節 共存できる海洋環境の持続可能性を目指して

おわりに

<要約>

私は約1年半の間、フィールドワークにおいて作物を育てることや保全することの難しさを学んだ。このような経験を通して、命を育てるということは、環境の豊かさが欠如していると実現しえないものであると実感した。動物と環境問題の関連性について関心のあった私は、環境破壊が原因で全滅の危機に瀕しているサンゴと海洋汚染の関連性について注目した。現在、地球温暖化やオニヒトデの大量発生などによる影響でサンゴ礁が壊滅の危機に瀕している。サンゴ礁を取り巻く環境に異常が生じており、豊かさが欠如しているのである。本論文では、いまや海洋汚染の指標ともいえるサンゴに焦点を当て、持続可能な海洋環境を調べていく。

第一章の第一節と第二節では、サンゴがどういった生物なのか、又人間生活においてどのような関連性があるのかを述べる。そして視野を広げ世界におけるサンゴ礁を取り上げる。第三節では、現在深刻化されている海洋汚染においてサンゴがどのような状況になっているのかを述べていく。

第二章では、海洋汚染において沖縄県で問題となっている赤土流出問題について述べていく。第一節と第二節では、この二大要因である土地開発と農地改革におけるサンゴへの影響について調べていく。第三節では、土地開発と農地における赤土流出防止活動の現状と展望を述べていきつつ、最終的には個人単位でできる農地からの対策について焦点を当てていく。

第三章では、農地からの赤土流出防止対策と地域活性化との結びつきについて調べていく。そして最終的に海洋環境が持続的に守られていくための観光地域づくりを提案していく。第一節では、赤土流出防止活動の一環として宮古島市で実践されている「緑肥作物栽培」について述べていく。第二節は緑肥作物であるヒマワリと宮古島市における地域活性化との結びつきについて述べていく。そして最後に第三節では、実際に参加した世界的会議を通して考察した人間と海洋生物との共存の実現を考えていく。

教育における「自然」と「植物」

- 自然と食の教育 -

上山 静香

はじめに

第一章 現代の問題

第一節 パーソナリティの形成の偏り

第二節 低下する基礎体力

第三節 アナログ的思考の欠如

第二章 問題の改善のためのアプローチ - 人格変容のために -

第一節 治療として - 園芸療法 -

第二節 教育として - 環境教育 -

第三節 人格の変容 - 二元的思考の一元化 -

第三章 自然と食の教育 - よりよい生活のために -

第一節 自然の教育 - びわ湖をめぐる環境活動 -

第二節 食の教育 - 食農教育 -

第三節 自然と食の教育 - ゼミナールでの野菜・米作り体験から

おわりに

<要約>

現代の若者が抱えている問題には心理的・身体的に様々なものがあり、心理的なものとして近年顕著になってきたパーソナリティの問題、身体的なものとして体力低下の問題が挙げられる。また、若者が陥りがちな「0 か 1 か」を二分してしまうデジタル的思考も問題となっていると考えられる。

本論文では、現代の若者が抱えている問題について解説・考察しながら、それらを改善しより良い生活が送れるようにする方法として考えられうるものを、医療の観点・教育の観点・人生観の変容を行うという観点の三つから挙げて紹介することで、問題改善の可能性を考える。

第一章では、現在問題とされている心理の状態・身体の状態・思考の状態についてそれぞれ述べた上で、第二章で医療の観点から園芸療法、教育の観点から環境教育について挙げ、これらが問題を改善する可能性を持つことを資料を用いながら解説し、その効果について考え、問題改善の糸口を探る。また、これら二つの根本にある「人生観を変容する」という観点から、物事のとらえ方や豊かな感性を身につけることの意義についても考察する。

これらを踏まえ、第三章では、「食育」というテーマを題材にしながら環境と関わっていく活動を各節で 3 つ紹介し、そこから「感性の豊かな若者」とは何か、また、そのような若者を育てるための方法について検討を行った。

思春期の摂食障害

—現代の食卓環境の見直し—

岡本麻未

はじめに

第一章 摂食障害とは

第一節 拒食症と過食症

第二節 患者の示す身体症状

第三節 食行動異常と精神不安

第二章 思春期と摂食障害

第一節 痩せ賛美の社会の心的影響

第二節 家族の特徴

第二節 親子の関係

第三章 食卓から見た摂食障害

第一節 食生活の外部化と家庭環境への影響

第二節 食卓の場が育むもの

第三節 回復への道

おわりに

<要約>

摂食障害は「拒食症」と「過食症」に二つに分類され、特に10代後半から20代前半の思春期の女性に多く発症している。主な症状は、極端な痩せに伴い、無月経、臓器の異常などが、異常な食行動による栄養不足が原因で起こり、この状態が続くと、物事の分別がつかなくなり万引き、嘔吐などの行動異常に発展する。食行動異常の背景には、肥満恐怖や身体像に対する認知のゆがみ、病識の欠如などが挙げられる。

摂食障害は社会文化的要因、個人的要因、家族的要因などが絡み合って発症し、病因は個人によって異なる。しかし、予測できる大きな要因として、現代社会は、痩せを賛美する風潮があり、その体型に対するプレッシャーが、特にダイエットやファッションに敏感な若い女性の間で病が流行している原因となっていると考えられる。また、現代の若者の特徴として「耐久欠如」が挙げられ、これは親の過保護、過干渉な育て方により、子供の自立性が阻害される為である。このように育てられた子供は思春期に、様々な問題に直面するたびに大きな葛藤が生じ、そのストレスが食行動異常を引き起こす要因となっている。また、近年、食生活の外部化が進み、孤食や個食が増加し、家族が集う食卓が減少したことも注目すべきである。食卓は、食事の基本を学び、家族間の絆を確認しあう重要な役割がある。家族団らんの食事をする事で、食事のありがたさ、家族との連帯感を強め、様々なストレスにも対処できる精神を養うことができ、食卓の重要性を見直すべきである。

ヒートアイランド現象

～地球・人間・未来のために～

川邊 由莉

はじめに

第一章 ヒートアイランドについて

第一節 ヒートアイランドとは

第二節 地球温暖化との関係

第三節 ヒートアイランドの影響と地球環境問題

第二章 ヒートアイランドの対策～一つの事例としての屋上緑化～

第一節 緑化による対策

第二節 屋上緑化の効果と影響

第三節 屋上緑化の普及率増加に向けて

第三節 身近なヒートアイランドの地域対策と市民にできること

第一節 地表の緑による対策～校庭緑化～

第二節 自治体の取り組み～打ち水～

第三節 未来への一歩

おわりに

<要約>

近年、地球温暖化など環境問題について注目されている。メディアにも多く取り上げられ、対策や人々の意識改善も行われている。しかし、都心部では大規模な土地開発や建築物の高層化により、環境に負荷を与え、緑地も大幅に減少している。緑地の減少は、大気汚染の悪化やヒートアイランド現象などの都市環境問題を引き起こす一因にもなっている。様々な地球環境問題の中でも私が注目したのは、ヒートアイランド現象である。私自身、都市化の進む大阪市に住んでいることからこの問題に興味を持った。そして、これらの要因を改善する対策のひとつとして、屋上緑化が存在する。屋上緑化は、省エネルギー効果や防火・防熱効果、建築物の保護にも繋がる。また、広い土地を使用することができない都心部のような場所に緑を増やすこともできる。私自身の住む大阪市でも近年開発が進み、様々な場所で大規模な屋上緑化を目にする機会が増え、さらに関心を持つようになった。

本論文では、第一章でヒートアイランドについて、地球温暖化も踏まえ歴史や現状を論述し、主な原因を述べ、問題点をあげた。第二章では、ヒートアイランドの対策の一つとして屋上緑化を取り上げ、効果や影響など詳しく論述し、第三章ではその他の身近なヒートアイランドの地域対策として、校庭緑化や打ち水、ドライミストなどを取り上げ、最後はヒートアイランド現象の今後の在り方について考察を行った。

音楽が人に与える情緒とそのしくみ

—人はなぜ音楽を聴くのか—

北井 裕子

はじめに

第一章 人と音楽

第一節 音楽の機能

第二節 生活を支える音楽

第三節 音楽と感情

第二章 複雑な社会における音楽の必要性

第一節 人の進化と音楽

第二節 どのようにして音楽が生まれたか

第三節 なぜ現代人は音楽を求めるのか

第三章 音楽と情緒

第一節 感情はなぜ起こるのか

第二節 音楽により影響するアドレナリン

第三節 情緒的情報の構造

おわりに

<要約>

人と音楽の関係と、音楽がどのように人に影響しているかということについて、まず第一章では、音楽がもつ機能や構成についての概要を論述している。第二章では、音楽がどのようにして生まれ、そして現代人がなぜ執拗に音楽を求めるのかということについて述べている。そして第三章では、音楽によって影響する人の感情や情操がどのようにしておこなわれるのか、またその構造に関して詳しく論述している。

現代社会における動物との共存

～命をめぐる子供と動物の関係～

櫻井 佑香

はじめに

第一章 子供と動物の関係

第一節 動物が子供に与える影響

第二節 子供の学習における動物の役割

第三節 喪失体験からの学ぶ事

第二章 子供の命・動物の命

第一節 動物を傷つける子供達

第二節 児童虐待と動物虐待

第三節 動物虐待は他犯罪の前兆なのか

第三章 動物との共存関係を深める

第一節 動物への思いやり

第二節 動物愛護教育

第三節 動物福祉と人間

おわりに

〈要約〉

近年メディアなどの情報から、大人だけでなく子供が動物を傷つける事件が増加しているように感じる。子供にとって動物は幼少のころからとても身近な存在であり、時にはなんでも話を聞いてくれる友人にもなりうる存在である。さらに、子供は動物と共に生活する事で責任や命の大切さを学ぶ事が出来るなど、とても良い影響を受けているのだ。しかし、その一方で子供達は動物をおもちゃのように扱い、傷つけ、時には殺してしまう。動物に安らぎを求める子供と動物を傷つける子供、この両極端な二面性の裏にはどのような問題が潜んでいるのか、現代の社会的問題を交えながら、考え述べていく。そしてその上で、子供(人間)と動物がより良い関係を築くためには、何が必要なのか、また今後どのような活動、教育を行うべきであるかを考えていく。

インターネットの子供への影響

－現実世界を生きるため－

中條 晨作

はじめに

第一章 インターネットについて

第一節 インターネットの歴史

第二節 インターネットの現状

第三節 インターネット上でのコミュニケーション

第二章 子供のインターネット利用の悪影響

第一節 インターネットなどの仮想世界の悪影響

第二節 仮想世界に生きること

第三節 インターネット・携帯電話依存症

第三章 現実世界に生きるため

第一節 依存症から抜け出すために

第二節 子供が仮想世界で育たないために

第三節 現実世界を生きるための環境教育による畑作業

おわりに

<要約>

現代はインターネットを利用することが当たり前の中になっている。しかし、ただインターネットを利用できるだけでなく、仮想世界の中に生きないようなインターネットの利用について考える。

第一章では、まずインターネットの歴史と、現代のインターネットの現状について述べ、第三節で SNS(Social Networking Service)やメールといった、インターネット上でのコミュニケーションについて述べる。

第二章では、インターネットの仮想世界が子供に与える影響、インターネット利用によって仮想世界の中に生きてしまうこと、インターネット・携帯電話依存症といった、子供が仮想世界の中に生きる問題について述べる。

第三章では、子供が仮想世界ではなく、現実世界を生きるための方法を考える。まずはインターネット・携帯電話依存症からの脱出の方法を、依存症の本人と周りの人からの立場で考える。次に、子供が仮想世界の中に生きることを未然に防ぐための、インターネット利用の注意点を考える。最後に、これらの方法や注意点を踏まえたうえで、私が環境教育のゼミ活動として2年間行った畑作業を、現実世界を生きる方法として紹介する。

青年期における人格形成とネット社会

～豊かな心の獲得に向けて～

辻 佳宏

はじめに

第一章 青年期的人格形成

- 第一節 ライフサイクルにおける青年期
- 第二節 人格形成に与えるインターネットの影響
- 第三節 社会背景の問題

第二章 インターネットといじめ

- 第一節 増える子供の利用
- 第二節 いじめに対する意識の変化
- 第三節 ネットいじめを通して考える人格形成の問題

第三章 豊かな心の獲得に向けて

- 第一節 愛他心の発達
- 第二節 変化する対人関係
- 第三節 ネット社会で健全に生きていくために

おわりに

<要約>

1990年代後半になってから急速に普及し始めたインターネット。それは、人々の生活をより便利に、より豊かなものへと変えてくれた。例えば、メールの登場でどこにいても瞬間的に情報を伝達することを可能にした。ネットワークが世界中に広まったおかげで、日本だけでなく世界中の人と関わることも出来るようになったのである。さらには、webを通して膨大な量の情報を得ることができ、多種多様な知識を瞬時に手にすることも出来るようになった。ネット上で繋がった集団は、同じ方向に傾きやすく、自分の意見を持たなくなり、個性すらも失いつつあるのである。

近年では、子供も自分専用の携帯電話を持つようになり、それによって学校における対人関係も大きく変わってしまった。メールやweb上でのやり取りが増え、実世界でのコミュニケーション能力が低下し、自分が好きな人とだけ接触をするという選択的な関係を好む傾向になりつつある。

本論では、青年期における発達課題を通して、インターネットが人格の形成にどのような影響を与えるのかを考えていく。また、いじめの問題にも触れ、それが社会的背景だけでなく、心の発達の問題にも関連しているということも述べていく。そして、今後のネット社会で青年期の子供たちが健全に生きていくにはどうすればよいのかを考えていく。

日本のバレエの現状とあるべき姿

辻並 ももか

はじめに

第一章 バレエの歴史

第一節 バレエの誕生

第二節 ロマン主義的バレエ

第三節 二十世紀から現代へ

第二章 バレエの魅力

第一節 美の追求

第二節 舞台を創る

第三節 日本人ダンサー森下洋子

第三章 これからのバレエ

第一節 世界のバレエ学校

第二節 日本のバレエを取り巻く環境

第三節 日本のバレエの未来

おわりに

<要約>

現在日本では多くのバレエ教室、バレエ団が設立され、CM で起用されるなど、馴染み深いものとなりつつある。大人からバレエを始める人や男性でバレエを習う人も増え、さらにバレエ人口は増えていく兆しをみせている。世界中のバレエ団で、日本人ダンサーが主役を務めることも珍しくなくなり、日本では高度なバレエ教育、バレエ環境が求められている。しかし、日本でのバレエの歴史はまだ浅く、国立のバレエ施設がないことなど、他国に大幅な遅れをとっているのが現状である。私自身も 17 年間クラシック・バレエを続けており、海外のコンクールに出場することや、国立のバレエ学校のレッスンを受けに行くこともあった。その中で、バレエの持つ魅力や可能性、日本のバレエ環境の改善すべき点に気付かされた。外国のバレエ教育を取り入れつつ、日本独自の教育体制を整えていくことが日本のバレエのさらなる発展につながるのではないだろうかと考えた。本論文では、バレエが歩んできた軌跡をたどり、バレエの魅力について触れていく。そして現在の日本のバレエ環境の課題から、バレエがどのように発展していくべきか考えていく。

小・中学校における食農教育の展開

中邑 衣里

はじめに

第一章 日本における食農教育について

第一節 食農教育とは

第二節 食と農が直面する諸問題

第三節 食農教育が重要視され始めた背景

第二章 小・中学校における食農教育の展開

第一節 小・中学校における食農教育の現状

第二節 総合的学習の時間の活用

第三節 地産地消の学校給食による食農教育

第三章 小・中学校における食農教育推進のために

第一節 環境教育における食農教育

第二節 学校・家庭・社会の連携

第三節 小・中学校における食農教育の目指すもの

おわりに

<要約>

食育とは栄養・環境・農業など幅広い領域の教育である。この卒業論文では、その中の農業・環境学領域の食育である「食農教育」に焦点をあてた。私は谷口ゼミナール活動での有機農業や米作りなどを通して、体験学習のおもしろみや重要性を実感したと同時に、食のありがたみをよりいっそう強く感じるようになった。このような経験から、「食農教育」について関心をもち、これを卒業論文のテーマとした。

子どもへの食に関する教育は大変重要であり、学校教育においても食農教育を推進していかなければならないと感じた。日本国内の小・中学校では、「給食」や「総合的学習の時間」を活用して「食農教育」を行っているが、具体的にどのような教育・活動をしているのか、そして今後あるべき食農教育の展望をこの論文では導いている。

まず第一章では日本における食農教育について、食農教育とは何か、食と農が直面している問題の現状を示し、学校教育において食農教育が重視され始めた背景を述べている。

第二章では本題である小・中学校における食農教育について、「総合的学習の時間」「地産地消の学校給食」に焦点をあて、実際にどのような教育が行われているのか、いくつか事例を交えながら述べている。

最後に第三章ではこの論文のまとめとしてまず、食農教育が環境教育の一環であり、環境教育における食農教育の目標について述べている。また、食農教育は学校内のみで完結するのではなく、子どもたちを取り巻くあらゆる主体の連携が重要であり、家庭・地域・農協との連携による食農教育の進め方について示し、最後にはこの論文全体のまとめを踏まえて、今後の食農教育における課題、目指すべきものについて述べている。

食環境教育の必要性

～奇形ザルから学ぶ自然環境問題～

山田 真理

はじめに

第一章 環境教育の在り方

第一節 環境教育の仕組み

第二節 学校における環境教育推進への手法

第三節 日本の環境教育の現状・問題

第二章 奇形ザルが示す自然環境問題

第一節 奇形ザルの発見と原因

第二節 残留農薬とは

第三節 生態系への影響

第三章 求められる食環境教育

第一節 食環境教育～食農教育とは～

第二節 こどもの食生活の現状～食環境教育の役割～

第三節 食農教育の課題～今後の発展に向けて～

おわりに

<要約>

私がこのテーマを選んだのは、ゼミナール活動でさまざまな環境教育の場に参加する中で、自分の肌で生命の尊さや、子どもたちの笑顔を感じることができた。その中でも、1 回生の時、哲学思想基礎論の授業で奇形ザルの存在を知った。そのことから生活する上で身近なところに農薬が使われ、私たちにも影響を及ぼす恐れがあるということを学んだ。また、1 年半のゼミナール活動において、有機農業の野菜・米をつくるサポートをする上で、環境教育・食環境教育に携わってきた。この取り組みの中で、事前準備の大変さや、実際に行う上での難しさを身を持って学んだ。このことから環境教育の推進をするうえで、指導者の育成にはどのような取り組みがなされているのか、仕組みを知りたいと思った。

この論文では、私が人間科学科の授業、ゼミナール活動の取り組みの中で学んだ、「奇形ザル」から捉えることができる農薬問題について触れ、環境教育・現在の食環境教育・食農教育、また食環境教育の今後の可能性について述べていく。

宗教の文化について

～「死」の受容と「無」の意味～

湯山 麻美

はじめに

第一章 宗教とは

第一節 宗教の起源

第二節 宗教の役割

第三節 宗教による儀礼の意義

第二章 「死」の受容と宗教

第一節 キリスト教

第二節 イスラム教

第三節 仏教

第三章 日本人の宗教意識

第一節 「無宗教」の意味

第二節 日本人の無神論

第三節 無宗教の新たな宗教的可能性

おわりに

<要約>

キリスト式の告別式に参列したことをきっかけに、私は各宗教の文化の違いや「死」に対する受容の多様性に興味を抱き、主に世界三大宗教について研究することにした。

そもそも宗教とは原始時代から存在しており、人間が抱く根源的な不安や死の恐怖を取り除くという役割を持っていた。

キリスト教はイエスによる愛に満ちた宗教であり、人は死ぬと、最後の審判によって天国行きか地獄行きかに振り分けられる。イスラム教は商人ムハンマドが預言者として築いた共同体から始まったものであり、人は死ぬと楽園か地獄に振り分けられる。現世は仮の世だと考え、来世で楽園に行くことを生きる目的としている。仏教はゴータマ・シッダールタが悟りを開くことで始まった。人間が生きる限り伴う苦しみから解放されるために、数々の教義を生み出した。仏教の死生観は輪廻転生であり、そこから悟りを開いた者だけが極楽浄土へ行けるとした。

これらの敬虔な宗教と比較して、特定の宗教を持たない現代の日本人は自分のことを「無宗教」だと言う。しかし、引け目や自嘲を含んでいると思われるその表現の裏側には、何も区別をしない「無」の魅力や、複数の宗教による儀式を伝統として守ってきた日本人の良さがあると考えられる。私は無宗教であることを誇りに思っ、死への恐怖に打ち勝つほどの意欲を持って生きていきたい。